

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

森鷗外論

平上, 敏明

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

1970-03-27

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019236>

森 鷗 外 論

平 上 敏 明

自己自身にかかわる關係、すなわち自己は、自分で自分を置いたのであるか、それとも他者によつて置かれたのであるか、いづれかでなければならぬ。

——キルケゴール

第一章

大正十一年七月九日、森鷗外は六十一才に渡る生涯を閉じた。臨終にせまつての讒言は「馬鹿馬鹿しい」の一言であつた。と長子森於菟は伝えている。

その三日前、鷗外は次のような遺言を口授した。

遺 言

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリコヽニ死ニ臨ンデ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打テ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ルヽ瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル

可ラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ手続ハソレゾレアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス

大正十一年七月六日

森林太郎言（拇印）

賀古鶴所書

この遺言状は法律的手続きを径ていない。従つてそれは法律的意义での遺言ではなく、その書面に『遺言』と題してあるが故にそうなのである。さらさら『遺言』には特に指定された宛名も無い。不特定多数の他者にむけられた物、公表されることを念頭においての物と考えられる。しかも、その『遺言』の意図が他者の目に映る自分の姿を予め自分で規定しておこうという所にあると考えられることから、それを『鷗外漁史とは誰ぞ』（明治三十三年一月）、『予が立場』（明治四十二年十二月）、『なかじきり』（大正五年七月）等と同じ系列の上にある評論的、一つの作品として読むことができる。いづれの場合も批判の対象は鷗外その人自身である。意

識的に他者の面前で自己を批評して見せることにより、それ等は独特な自己弁護の役割を果している。自己弁護がまた自己主張の屈折した一変形であることも容易に認められるところであろう。

勿論、鷗外自身がその『遺言』を作品として意識していたか、否かを判断する材料は無い。むしろ、自己の死という絶対的な権威に拠る正真正直な自己主張がその遺言状なのだとする方が素直な解釈ではあるだろう。自己主張とは、それをするに足ると認め得る権威を自己の内部に有する者にのみ可能な行為である。先の『鷗外漁史』とは誰ぞ『予が立場』『なかじきり』において、鷗外はしきりに自分が何者でも無いことを繰返すことで、自己自身に何の疑いをも抱かぬらしい他者を間接的に批評し、それによって自己弁護的自己主張を行っている。そこではまだ自ずからの内に、他者に語るに値する権威を認めていないために、鷗外は真直な自己主張を行ってはいない。だが、この遺言状において鷗外は「奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス」る自己の死という権威の上に立っているのである。鷗外がその遺言状を真に自己主張の書足り得ると考えたであろうことは、充分推察できるところである。遺言状を一貫して流れている気負いがそれを示しているとも言える。しかし、実際に公表されたその遺言状において、鷗外が他者に対して為し得たのは、自己の死への「アラユル外形的取扱ヒ」の拒絶の域を越えてはいない。そこでは、自己の自己たる由縁が何一つ語られていないために、その『遺言』は充実な自己主張とは成り得ていないのである。

鷗外の『遺言』は、鷗外にしては珍らしく論理的な錯誤や矛盾を内包していると言える。自ずから「石見人森林太郎トシテ死セント

欲ス」と言い、「墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス」と指示している鷗外がこの時望んでいたのは、ただ個人的な死を静かに死にたい、ということではなかったのか。それ故に、私人森林太郎の個人的な死を、決してそのようなモノとして取扱ひそうもない「官権威力」を含めて「一切ノ」他者に対してかくも激しい拒否の態度を取ったのである。『遺言』には、他者によって規定づけられ奪われ続けて来た自己の生命を奪回しようとする鷗外の必死の思いが流れている。だが、私人森林太郎が自ずからの死を個人的な死であると公けに言明しなければならぬこと、それ自体がすでに矛盾であり、鷗外自身の分裂した在り方を物語っていると言わねばならない。少くとも鷗外は他者によって規定された自己を真性の自己とは認めてはいなかった。だからこそ幾らかの余裕を持って、意識的に、他者の規定した自己を他者の面前で批評することが可能だったのであり、「私の考えでは私は私で自分の気に入った事を自分の勝手にしてゐるのです。それで気が済んでゐるのです。人の上座に据ゑられたって困りもしないが、下座に据ゑられたって困りもしません」（予が立場）などと口に出来たのだ。だが、迫り来る死を予測してこの『遺言』において鷗外が望んだのは真の自己主張だったはずではないか。ならば、鷗外は何よりも他者によって与えられ続けて来た仮象の鷗外像の裏に在るもう一人の真性の自己について語るべきであったのだ。しかし、結局鷗外は『遺言』を先のような物として残すことによって再度公人として振舞ってしまっている。『遺言』はやはり他者の目を意識する意識の上に成立しており、他者によって規定された自己にのみ言葉を費いやしているのである。『遺言』が『鷗外漁史』とは誰ぞ』や『予が立場』等と同じ系列の延長線上か

ら逃れられていないと思われる理由もそこにあると言わねばならぬ。

死の三年前、大正八年、鷗外は最後の翻訳集『蛙』を著し、そのはしがきを草した際「わたしは蛙の両棲生活を継続することが今既に長きに過ぎた。帰りなむ、いざ。帰りなむいざ」と記した。鷗外の「両棲生活」は様々な形で見ることが出来るが、ここでは、鷗外自身が自分の生涯を何程かの分裂をきたしているモノとして意識していること、さらにその分裂を鷗外自身が克服したいと願っていたことの現れを「帰りなむ、いざ。帰りなむ、いざ」という口吻の中に見ておきたいのである。又、文字通り自分の一生の『なかじきり』の為に書かれた文章の中で鷗外は言う。「わたくしには初より自己が文士である。芸術家であると云ふ覚悟は無かった。又哲学者を以って自ら居たことも無く、歴史家を以って自ら任じたことも無い。唯、暫留の地が偶々田園なりし故に耕し、偶々水涯なりし故に釣った如きものである。約めて云へばわたくしは終始チレッタンスムを以って人に知られた」と。文士、芸術家、哲学者、歴史家、その他、地者の目に映るどのような姿も、鷗外自身にとっては仮象の自己に過ぎなかったのだと言わねばならない。従って、鷗外の終生の問題は、約めて云へばチレッタントという仮象を生きている自己が何者であるかを問うことであつたと言えるであろう。

そして、先回りして結論からいえば、鷗外はその問に対する解答をついに見出すことは無かったのだ。何故なら、死に臨んでの「馬鹿馬鹿しい」との最後の言葉が、先の『遺言』を含めて、終いに自己の分裂を止揚できなかった鷗外の自己の生涯への否定的な詠嘆と解し得るからである。すでに『遺言』をしたためて他者との関係を

一切整理してしまつた後のこの言葉に他者の意識されている気遣いはない。そこでは個人森林太郎が真正面に見据られている。自己撞着は在っても自己分裂は無い。臨終の讒言は自己自身に向けられている。長きに過ぎた「両棲生活」の果てによりやく自分自身に到達した時、鷗外は「馬鹿馬鹿しい」という言葉以外の言葉を持ち合せなかつた。それが、最後に自己の生命を自己の意志で生きることの出来なかつた鷗外の、自分の生涯に対する絶望もしくは自嘲の吐き以外の何んでもあり得よう。今、死なんとする時鷗外が対座していたのは、何物でもない自己、空虚な自己ではなかつたのか。

それが意識された両棲生活である以上、それは鷗外の生き延びようとする法だつたはずである。そして、生き延びた果てに自分に残されたのが虚無だけであるとは鷗外自身も予期していたはずはない。虚無を期待しながら生きる者はない。否、常に仮象の自己をか生きられない自分を意識し続けていた鷗外は、実は虚無と背中合せに生きていたのだと言ふことができる。『遺言』の中に鷗外は「死ハ一切を打テ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス」と力説した。この誰にも明々白々な事実を、あの聡明な鷗外が短かい『遺言』の中に敢えて印さずにはおられなかつた理由も、その言葉の中に、たとえ敗北ではあつても、ようやく自己の死を死ぬことが許され、虚無との苦しい戦いから逃れられる鷗外の秘かな自負がこめられているのだとすれば、容易に理解できるのである。

第二章

明治二十一年九月八日、二十七才の鷗外は衛生制度調査及び軍隊

衛生学研究のためのドイツ留学の任を終え、帰国した。

同十二日、偕行社において、衛生部將校に対して鷗外は次のような挨拶を行っている。

今日海外視る所の事物に就て演説すべきなれども未だ敢てせざる者は抑も故あり、凡そ欧州の規律殊に厳正なる軍隊にては、年少の將校等の陸軍部内に関する言論は常に其趣旨を上官に聞し、其裁可を得て後公衆に向ひ之を演説するを得るなり。是を以て風紀紊れず僕心竊に之を羨む。僕敢て本那軍隊にても一般に此の如きを希望すと言はず、然れども自己一身に限りては他日或は言はんと欲することあるも必らず之を一上官に質して後之を言はんと欲す、是れ僕が今日匆卒の際敢て濫に口舌を弄するを欲せざる所以なり。

帰国第一声とも言うべきこの挨拶で鷗外が語っているのは、自分は何も言わぬ者であるというだけである。たとえそれが俗世間とは異なる軍隊内の儀礼的な挨拶であるとしても、俊秀であることを認められ、官費留学を終えて帰国した青年の言葉としては、やはり不自然であり、奇妙である。あるいは、課せられた任務に必要な事以上の何かを見過ぎた鷗外に「一上官」より、あらかじめ箝口令が下されていたのかもしれない。二度繰返して使われている「一上官」という言葉が、そのような雰囲気をおわせている。しかし、この挨拶が注意を引くのは、「今日匆卒の際敢て濫に口舌を弄するを欲せざる」と言うその理由が、その言葉の通り、軍隊内の規律を重んじ、風紀の紊れることを恐れるからか否かと別、ここで鷗外は自分の置かれている困難な状況を自ずから引き受け、引き受けるが故に今日は敢えて黙するのだ、と見栄を切っているように思われ

ることである。おそらく、この挨拶の力点は「自己一身に限りては他日或は言はんと欲することあるも」の部分にある。偕行社でのこの挨拶の中にすでに鷗外の諦念の芽ばえを見ようとするのは、完結してしまった鷗外の生涯の終着点に焦点を絞りすぎた見解のように思われる。なるほど、単に軍隊組織のみならず日本の近代化は先進国ドイツの中で生活して来た鷗外に満足の行くものではなかつたろう。『妄想』の中に「故郷は恋しい。美しい。懐かしい夢の国として故郷は恋しい。併し自分の研究しなくてはならないことになっていく学術を真に研究するには、その学術の新しい田地を開墾して行くには、まだ種々の要約の欠けてゐる国に帰るのは残惜しい」とあることは良く知られている。しかし、『妄想』は明治四十四年の作である。その『妄想』にうかがわれる沈鬱な気分をそのままこの若い鷗外の言葉の中に見出そうとするのは方法上の誤りではないだろうか。帰国したばかりの二十七才の鷗外にとって、否定さるべきはあくまで自己以外の何者かなのであって、決して自己自身ではないのである。いわば、この時鷗外は自己自身にはいささかの諦念も覚えていない。偕行社でのこの挨拶の中で鷗外は、自己を取り巻く状況の論理を逆手にとり、その上で秘かに己れの自負を誇示しているのである。言い換えれば、逃れ難い状況の中に敢えて自ずから没入し、そうすることで己れの問題意識だけは無傷のまま守り通そうとする意図がこのような奇妙な言葉の連なりとなっているのである。

帰国後の鷗外は「横井軍医長に答ふ」、「日本兵食論大意」等を公表し、まず自然科学方面における評論活動を開始する。翌二十二

年夏には、落合直文等と新声社（SSS）を起し、訳詩集『於母影』を発表した。この『於母影』の稿料をもとに、十月、文学評論雑誌『しがらみ草紙』を創刊し、鷗外の〈戦鬪的啓蒙〉と呼ばれる一時期を形づくることとなる。創刊号の論文『柵草紙の本領を論ず』には、「嗚呼、我混沌たる文界も、その蕩清の期は応に近きに在るべし。余等がしがらみ草紙の発行を企てしも、亦聊審美的の眼を以て、天下の文章を評論し、その真贋を較明し、工竄を披剥して、以て自然の力を助け、蕩清の功を速にせんと欲するなり」とある。こうして鷗外は軍人、自然科学者としての職務をつとめる一方、西洋思想、西洋文学の紹介者、啓蒙家として、翻訳、創作、評論、論争に精力的な活動を開始する。この『しがらみ草紙』創刊から、明治三十二年小倉左遷までの約十年に渡る〈戦鬪的啓蒙〉の期間、鷗外の創作は次の四編にすぎない。

『舞姫』明治二十三年一月

『うたかたの記』同二十三年八月

『文づかひ』同二十四年一月

『そめちがえ』同三十年八月

〈戦鬪的啓蒙〉の内容が主として批評、評論の領域にあったことを示している。同時にこれは鷗外が性急に論理的、思想的課題を追求していたことの現われとも見ることが出来るはずである。他者に何程かの方向性を示すという意味での指示性において、批評、評論は創作よりも明析であり得るからである。前述の創刊号論文においても、『しがらみ草紙』同人あるいは鷗外自ずからが「混沌たる文界」の内に在ると言うよりは、むしろ、それへの審判者として、批評、評論をもつぱらにすることが語られている。「混沌」を「蕩清」す

ると言い、「真贋を較明し、工竄を披剥」するとは、一定の価値観を確立するということである。創刊号論文にはさらに次のようにある。「今の詩文を言はんと欲するものは、那人の歌論と支邦人の詩論文則とにのみ拠るべきにあらず。西欧文学者が審美学の基址の上に築き起したる詩学を以て準繩となすことの止むべからざるを知ればなり。論者或は曰く、今の小説を論ずるもの、多くの標準を西欧諸国に取る。その論証愈博くしてその意見愈狭し。寧これを常識に徴することの確なるに若かずと。余等は此般の言を聞く毎に、未だ曾て剖斗折衡の政に想到らずんばあらず。若論者の意を弘めてこれを言はゞ、吾に審美学と其一部なる詩学とのみならず、道学も哲学も悉くこれを常識に徴して可なり。何を苦みてか復専門特科を設くることをなさん。蓋標準もこれを用ゐること、その法を得ざる時は、承矯の力を見るに由なし」ここでは鷗外等が提出しようとする標準観——価値が「西欧」に求められようとされていることが解る。しかも、すでに紹介されている西欧の標準が今だ完全ではないとも言われている。そして『しがらみ草紙』同人だけが日本と西欧への公平な理解を持って「混沌」の中に標準をもたらすことができるであろうことが高らかに表明されている。その自信は、鷗外に限って言えば、自ずからの西欧体験とそこでの広範な知識によって裏づけされていると考えて良いだろう。明治二十四年に坪内逍遙との間で争われるいわゆる〈没理想論争〉で取った鷗外の態度戦術が殆んど完全にハルトマンの美学に拠って自ずから怪しむところがなかったと言ふことの中にも、それはうかがわれるのである。

ともかく、かつて偕行社において、「自己一身に限りては他日或は言はんと欲することあるも」と言いながら沈黙を守った鷗外は、

ようやく自己内面の問題意識を他者に向って語り出そうとしているわけである。いわば、鷗外は自ずからの存在に公的意義を獲得しようとする意味での公人たらんとしていると見える。おそらく明治三十二年に小倉へ左遷されるまでの、この〈戦鬪的啓蒙〉の期間が、鷗外がその生涯にただ一度だけ持つことの出来た自己主張の季節だったのである。

鷗外は明治二十二年三月、西周の媒妁により海軍中将男爵赤松則良の長女登志子と結婚し、翌二十三年九月離婚した。こういう事の背景には様々な事情があるのであるが、ここでは、結局のところ離婚に踏み切ったという鷗外の意識のありようが、いわば鷗外の公的存在としての〈戦鬪的啓蒙〉を支える意識と、少しの矛盾なく符合することに留意しておきたいのである。後年鷗外は長子於菟に「不幸にして生涯を共にするに足らぬ妻であると知った時とるべき途は二つのみだ。一つは共に破滅するのだ。もう一つは断然離婚するのだ。いづれとも決心したら決して迷ってはならぬ。批難はすべて自ら負のだ」と語ったという。これは実は鷗外の歴史小説の多くと、彼自身の生涯を貫く自己主張か自己滅却かという命題の設定であるといえる。そして、鷗外自身の言葉に従えば、この〈戦鬪的啓蒙〉期の内にある妻登志子との離婚は言うまでもなく鷗外の自己主張だったのである。

第三章

『舞姫』は鷗外の文壇処女作である。文壇処女作とは、実際に出来上ったのは『うたかたの記』が先であるが、公けにされたのは『舞姫』の方が最初であったという事情による。すでに近代文学史上

の古典的位置を占めるこの『舞姫』の筋書きを述べる必要はないであろう。今はこの『舞姫』が鷗外自身の意識の中で如何ような位置を占めるものかという問題について考えてみたいのである。

結論から先に言えば、『舞姫』は鷗外の闘争宣言^{マニフェスト}ではないか、と言うことである。そう考えられることの理由は二つある。一つは『舞姫』が敢えて最初に発表されたということと、もう一つはその作品の内容自体による。

偕行社での挨拶から遺言まで、その生涯に渡って鷗外は自己の行為に意識的であった。意識的であるとは行為者が常に自己の行為を意識しつづけているというだけでなく、その行為が他者との間に生じせしめる影響や効果についても行為者によって意識されていることを意味する。この場合、行為者は自己の行為の選択を純粹に自ずからの意志でというよりも、他者との間に生じるであろう影響や効果を予測し、そこから判断することも起り得る。仮りに、後者の側から選択された行為があるとして、それを妥協と呼ぶことはやはり誤りではない。しかし、その妥協が他者への全面降伏なのではなく、行為者が意志的に行った妥協であることは注意されねばならない。何故なら、その結果としての行為は、常にその背後に在る行為者の意識よりは矮小化されたモノとなるからである。表現された行為の表側にのみ眼を注いでいては結局行為者の真意を見誤ってしまうことになる。偕行社での挨拶を一例として、鷗外においては特にこの傾向が強いと言わねばならない。いわば、鷗外においては、鷗外の行為の外枠は行為者である鷗外自身の意識によってしっかりと押えつけられているのである。それだからなお『舞姫』を敢えて最初に発表した鷗外の行為を看過することができないのである。

『舞姫』は明治二十三年一月雑誌『国民の友』に発表された。この前年の暮頃鷗外のもとに第二章で触れた赤松登志子との縁談が生じている。この縁談は鷗外の意志というよりも、周囲の意向の方が強かった。従って『舞姫』は必ずしも意に適うとは言いがたい縁談を進めようとする周囲の人々に鷗外が示した牽制ととれないこともない。多分『舞姫』を書いている鷗外自身胸中には確かにそのような意識も混在していたであろう。しかし、それは『舞姫』創作の動機の説明の一部とは成り得ても、それが最初に発表されねばならなかったことの理由の説明とは成り難い。そのような、いわば家庭の事情とでもいふべき理由に対しては、すでに同人誌『しがらみ草紙』を発行しつつあった鷗外が完成した順序に従って『うたかたの記』を、次に『舞姫』を発表しても充分間に合うからである。やはり『舞姫』が最初に発表されるべき理由はもっと深い所にあるのであり、しかもその理由はその作品自体の中に示されているといわねばならない。

『舞姫』に見る限り、その主人公太田豊太郎は、確かに自ずからの恋愛の対象である異国の女性エリスを捨て、日本の前近代的な天皇制官僚組織の中に回帰している。それは、一度は目醒めた近代的自我が状況の重たさの前に膝を屈した物語りである。その意味において『舞姫』を挫折の書とすることは誤りではない。しかし、これは同時に作者鷗外の自我の崩壊もしくは喪失を示すものであるか。おそらくそうではないのである。むしろ、『舞姫』は鷗外の強固な自我なしには成り立たなかったのではないだろうか。換言すれば、鷗外は自己の自我の所在の提示とそれの保持のために『舞姫』を書いたのではないかということである。すでに多くの論者によつ

て指摘されている如く、『舞姫』においては主人公太田が近代的自我に目醒めて行く過程が極めて論理的でありながら、他方、それが天皇制官僚主義の前に敗北して行く過程が多くの偶然的な要因にゆだねられており、ひどく非論理的な様相を呈している。ここから『舞姫』の、ひいては鷗外の限界を云々する見解がある。だが、それも鷗外の周到な配慮の所産なのではあるまいか。仮りに太田の自我喪失の過程を論理的に追求しようとすれば、それは太田が一度は抱くに至った近代的自我が周囲の前近代的状況に対して如何ような可能性があるいは意味があるかと問うことである。そして、それがそれが太田が、否、鷗外が「自然科学を育てる霧開気のある、便利な国を跡に見て、夢の故郷へ旅立った」（妄想）時、持ちこした課題ではなかったのだろうか。太田が彼の地で抱いた近代的自我は、日本の官僚機構に回帰することで、初めて日本の現実の中で社会化され、試めされるはずのものである。それは決して『舞姫』執筆当時すでに解決済みの問題ではなかったのである。その問題があればこそ鷗外は帰国したと言うのは強引すぎるとしても、日本に帰ってからの自ずからの存在理由をその辺に求めようとする問題意識が鷗外に無かったとは言えない。それこそが帰国後の鷗外の公人たらんとする気負いの生じる因であり、〈戦鬪的啓蒙〉活動のエネルギー源であったのである。もし『舞姫』一編をすでに鷗外の〈転向〉を物語る書として読むとすれば、その後の鷗外の活動は不可解なモノと化してしまうだろう。先に鷗外における行為と意識の関わり方の特殊性について考察したが、創作もまた行為の内の一つであるとすれば、次のように言うことが許されるだろう。鷗外の小説においてはその小説の外枠は作者鷗外自身の意識によって常にしっかりと押え

つけられている。それ故に鷗外の小説には鷗外自身にとって不分明なモノの持ちこまれる気遣いはないのである。鷗外は自己の内なる混沌を言葉との格闘によって浄化しようとする型の小説家ではない。鷗外自身『歴史其俎と歴史離れ』（大正四年一月）に「わたくしの作品は概して dionysisch でなくって、apollonisch なのだ。わたくしはまだ作品を dionysisch にしようとして努力したことはない」と書き、『キタ・セクスアリス』（明治四十二年七月）に「僕はどんな芸術品でも、自己弁護でないようなものは無いように思ふ。それは人生が自己弁護であるからである」と印している。その当否はともかく、このような鷗外の芸術観や傾向は、すでに『舞姫』の中に見えていると言わねばならない。少なくとも『舞姫』においては、鷗外の主要な関心事が日本の官僚制度や家族制度に対する意識的な批判という所に在ったと言ふことはできない。それはこれからのモノとして柵上げされた所で『舞姫』は仕上げられているのである。そして、それが『舞姫』の完成度の高さを保障しているのである。

『舞姫』一編のテーマは、あくまで、愛する者と別れねばならなかった男の肉体的悲しみを訴えようとする所にある。ロマンチズムの表現である。太田は決してそれを良しとして日本の官僚機構に回帰するのではなく、止むを得ざるモノとしてそうするのである。勿論、そうすることの意味が厳しく追求されていないことは『舞姫』末尾の「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日まで残りけり」という高名な結びからも明きらかである。一度は目醒めた太田の近代的自我の主体的発露はついになく、ただ太田の傷ついた心情が示さ

れているにすぎない。しかし、もはや説明するまでもなく『舞姫』は決して思想小説ではないのであり、小説に小説以外の要素を持ち込まないことが鷗外の創作の方法だったのである。それ故に、ここで問題にしてみたいのは、そのロマンチズムの質についてである。

十八世紀末から十九世紀中頃の西欧において提唱されるロマンチズムは、中世的封建的な人間支配を脱却し、個としての人間の確立を意図し、従って、自我の拡大、人間性の解放、思想感情の自由を求める精神であると言ふことができよう。それは整合された古典主義と対立し、芸術の自律性を主張し、恋愛の尊重、直感の重視等、個人を絶対とする立場から旧来の道徳や風習を激しく批判し、人生への情熱を高唱する。だが、同時にこれは常に情念において先取りされる性質のモノであり、人間にとっての永遠の憧憬であるのかもしれない。多くの浪漫主義運動が、結局、遅ればせな現実からは報いられず次第に感傷と悲哀の色を増し、やがて厭世的になることを逃れ得なかつたからである。日本における浪漫主義文学運動の代表例を北村秀谷等の『文学界』に求めるのはすでに通説である。そして、それがやはり日本の特殊性を学んでいるのが事実であるとしても、浪漫主義の属性である前記の傾向においては同様の過程をたどつたと言われないわけにはいかないのである。

今、ここで考えてみたいのは、そのような浪漫主義運動のいわば隆盛と衰亡の歴史の過程と、『舞姫』一編の内にある主人公太田豊太郎の意識の推移とは無縁だということである。確かに太田の内面においてもロマンチズムは覚醒し消滅しているかに見える。しかし、同様のことが浪漫主義運動においては現実の歴史的事実である

のに対して、『舞姫』におけるそれはあくまでも一編の小説の中の事象である。一方が生きられたロマンチズムであるとすれば、一方はつくられたロマンチズムなのである。鷗外の意識における内在的論理に従って読むとすれば『舞姫』のそれはあくまで小説内での効果を基として成されていると見るべきである。『舞姫』は愛する者と別れねばならなかった男の傷心を提示することで、その悲哀を浮彫りにする。そして、その悲哀は読者の意識の如何に関わり、実は、一度は目醒めた太田の近代的自我、あるいは開かれた人間性との惜別に根差している。換言すれば、『舞姫』は近代的自我の消滅までをも描くことにより、一層、その覚醒を印象づけることに成功しているのである。『舞姫』は近代的自我の肯定という立場から成されたものであり、しかも、その立場の表明以上のものではない。それ故に、『舞姫』は理念の所産であつて、決して、何程かの情念の定着ではないと言わねばならない。そのロマンチズムはすでに鷗外自身の検証を経た虚構フィクションのロマンチズムである。

『舞姫』において、この虚構のロマンチズムは古い外表を纏っている。最早や明白なように、鷗外が『舞姫』に用いた型タイプはそれまでの日本人がいかにも慣れ親しんで来たモノである。或るモノの衰亡を描くことによつて、かえつてその存在を際出たせるという手法。あるいは、百万石取るか女と寝よか、ということに近似した状況設定。いわば、鷗外は古い皮袋に新しい酒をもつことに充分に成功しているのである。そして『舞姫』におけるこの新旧の二面性は意外に大きな問題の所在を示唆しているのである。

虚構のロマンチズムであるからといって『舞姫』が鷗外の内面的な問題意識とは無縁な手なぐさみではないことは言うまでもな

い。むしろ『舞姫』を含めて鷗外の作品ほど自己内面の意識のありようを明瞭に伝げる作品は珍らしいとさえ言える。逆説的に響くかもしれないが、鷗外の小説は悉く本当の所で書かれている。勿論、これは書かれた事柄が実際に在ったことか否かとか、それがいわゆる私小説か否かという視点からの問題ではなく、作品と作家の意識の関わり方における問題なのである。いわば作品と作家の意識との距離の問題である。その距離が鷗外の場合にはきわめて近接しているのである。同時にそれがいかに近接していても、そこにやはり距離が存在しているという、一つの事実の二つの側面の意味が絡み合っているところに鷗外の小説の際立った性格がある。

おそらく、人は生きていくからこそ行為する。創作もまた実人生における一つの行為にすぎない。それ故に、創作のために生きる者とはそれ自体一個の虚構の存在である。そのような人が自己の生きている姿をいかに事実どおりに報告してみても、それは到底普通生活者の実人生を表現するに至らない。それ等と鷗外とその作品は性格を異にする。その是非は別として、鷗外が終始普通生活者の意識を内面に持ち続けていたことは日本の〈近代〉とその中に生きる人間を考へる場合もつと注目されて良いはずである。勿論、この場合鷗外の社会的地位やら生活程度が問題なのではない。何故なら、近代という時代が社会総体の重みが、共同体的な紐帯から解き放たれた諸個人のその一つ一つの肩にゆだねられる時代であり、それ故にこそ近代的自我の問題が重要視されるのだとすれば、まず、その人間がどのように自己の時代と社会に向いあつたかという視点が取り出されねばならないからである。そして、普通生活者の多くが無意識裡に、鷗外が意識的にという違いがあつても、双方が共にそ

の重みを荷っている点をやはり重視したのである。生きる、あるいは生き続けるとは、たとえそれがどんなに腹立しいものであっても、自己以外の何モノかと関係し、その関係を通して実相の浮び出るモノである。それは、他者との、良く言えば調和、悪く言えば妥協を不断に強要する。鷗外の作品が興味深いのは、それが常に他者との接点の所で成されており、それ故に鷗外の普通生活者としての意識が明瞭に理解されるからである。そうすることが鷗外に可能であったのは、実人生の意味が鷗外自身によって意識されていたからに他ならない。いわば、鷗外は他者との関係をどうするかという配慮を秘めながら創作するのである。政治という言葉を広義に解釈して、他者との関係を処理する方法という意味をも含ませるとすれば、創作をする時の鷗外には常に政治的な配慮が働いているといえる。そして、この政治的配慮は実生活者鷗外の内側にあつて、その作品から何程かの政治的主張や思想を払拭させる方向に作用しているのである。この結果、鷗外の作品の多くは、せいぜいその立場の表明以上のものには成り得なかつたと言えるだろう。しかし、同時にその作用は、作品をこれ以上書いたら自己を他者に押しつけることになるという一歩手前の緊張した地点で、ようやく歯止めを食らわしていることでもある。特に、『舞姫』においてその傾向が顕著であると言わねばならない。周到に虚構のロマンチズムを創り上げていく鷗外の内面には、自ずからの手によって封印された激しいロマンチズムが渦巻いている。この緊張が、〈雑文体〉と呼ばれる擬古文調の小説『舞姫』の中に、張りつめた瑞々しい情感を生み出したのである。

もし、『舞姫』の限界を云々するとすれば、それは、太田豊太郎

が日本に回帰しているそのことではなく、その虚構のロマンチズムを表現するのに使われた古い道具立てについてでなければならぬ。しかし、それは鷗外一個の限界である以前に、新しい酒をもる新しい皮袋の未成熟であった当時の日本の〈近代〉化という状況の問題であるといわねばならない。新しい理念は理解された。だが、それを実現する地平はまだ見当らない。その認識の上で鷗外はともかくも新しい理念の肯定を『舞姫』に書きつけたのである。新しい理念の実現のための闘いはそれから後の問題である。『舞姫』の背後には、自ずからがその闘いに跳むものであるという、鷗外のロマンチックな心情が隠されている。『舞姫』の闘争宣言たり得る性格がそこにある。『舞姫』は最初に発表するに足る格好の小説作品だったのである。

宣言とは厳密な論理性とは一度切断した所で、それを為す者のロマンチックな心情によって支えられる性質のモノである。『舞姫』を支えている鷗外の心情は、日本の〈近代〉化を自ずから荷おうとする鷗外の自負なのであり、選民意識の現れとも見える。むしろ、『舞姫』は日本に帰りそこで何程かの役割を果そうとする鷗外が、そうしなければならぬことによって支払った犠牲の大きさ、あるいは断念の激しさを、思い入れ一杯に詠い上げた小説だとさえ言えるのである。